艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝　魚雷艇「島千鳥」型

火龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝　魚雷艇「島千鳥」型

【Ｎコード】
Ｎ０３１８Ｚ

【作者名】
火龍

【あらすじ】
　史実において、日本は船舶用の小型で高い出力を持つ機関の製造に苦戦し、アメリカのＰＴボートに匹敵するような高速力の魚雷艇を安定して多数建造することが難しかった。一方勇の転移した過去では指定型船舶建造助成法の施行によって日本にも個人所有の遊覧船という存在が根付いたため、この問題は徐々に解消されていった。ところが、満を持して建造された魚雷艇はその情勢の変化によって、実に数奇な生涯を送ることとなる。本作は、「艦魂たちともうひとつの日本海軍史」外伝第二弾です。

（十二月十九日、第八話以降の投稿順序を修正致しました。読者の方々に御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます）

第一話　判で押した副産物

日露戦争後に施行された指定型船舶建造助成法により、民間の船舶保有量は飛躍的に増大。そして経済的に余裕のある人間の中には、二五トン級指定船や海軍の装載艇と同型の船艇を、個人用の遊覧船として保有する例も多くなっていった。

遊覧船の増加は、特に小型で高出力な船舶用機関を製造する技術を向上させる上で、大いに役立った。史実では小型船と言えば漁船ぐらいしかなかったために、魚雷艇や魚雷艇隼艇といった高速小型艇の建造に苦戦した日本であったが、その問題が解消されつつあったのである。

そして軍縮条約期、日本海軍は成熟した国内の技術を生かした魚雷艇の建造を計画。二五トン級指定船に大馬力の機関を搭載することで、以下のような要目の魚雷艇も建造可能であると判断された。

全長一七・五メートル、幅三・五メートル、喫水〇・七メートル、深さ一・七五メートル
基準排水量二五トン、満載排水量三五トン
機関ディーゼル二基二軸、二四〇〇馬力、速力四〇ノット、燃料搭載量七・二トン
・航続距離
一〇ノット（一六〇馬力）で一九二〇海里（八日）
一五ノット（三六〇馬力）で一四四〇海里（四日）
二〇ノット（六四〇馬力）で九六〇海里（二日）
三〇ノット（一四四〇馬力）で七二〇海里（一日）
四〇ノット（二四〇〇馬力）で四八〇海里（半日）
・居住区

八名分（士官一、予備士官、下士官兵六）
・兵装
二〇ミリ単装機銃二基二門（航空機用の旋回機銃とほぼ同型。船首楼及び船橋後部）
五三・三センチ魚雷落射機二基（船体中央部左右）
爆雷八個（投下軌条二基、船尾に軌条を並列配置）

一番艇を含めた十二隻は一九三九年十月一日から各艇につき一日ずつずらして起工し、翌年二月二十八日から同じく一日刻みで進水。魚雷艇は鳥の名や鳥に関する言葉に因んで命名されることになり、一番艇の「島千鳥」を初めとして、以下の十二隻が各艇の進水した日を以て命名された。

島千鳥、萱鳥、萱根鳥、巣立鳥、田長鳥、巧鳥、黄昏鳥、橘鳥、種蒔鳥、旅鳥、千歳鳥、千鳥

さらに同時期、史実の隼艇を参考にした砲艇の建造も決定。魚雷落射機と引き換えにする形で、船体中央部の中心線上に二〇ミリ単装機銃二門を追加装備した砲艇十二隻が、進水と同日を以て以下のように命名されることとなった。

藍鮫、青鮫、油鮫、尾長鮫、神楽鮫、銀鮫、坂田鮫、蝶鮫、角鮫、猫鮫、鼠鮫、星鮫

根拠地に押し寄せる上陸船団等を主な目標とした魚雷艇と異なり、彼女たちの建造された目的は、敵小型舟艇の撃破や自軍小型艦艇の護衛であった。太平洋上の島々、特にフィリピンには米軍魚雷艇の配備が見込まれていることから、攻略に向かった艦隊が魚雷艇の攻撃を受けることも考えられるのだ。

当初は四〇ミリ機関砲の搭載も計画されたが、同じ単装でも一基当たりの重量が二〇ミリ機銃より桁違いに大きい（後者が二百キロ前後に対して後者は一トン以上）こと、また砲艇用にわざわざ四〇ミリ機関砲の単装砲架を新規設計する手間が嫌われたことなどから断念。米軍魚雷艇の船体は木製であることから、二〇ミリ機銃でも焼夷榴散弾を使えば威力に不足は無いとされた。

一九四〇年二月二十八日、横須賀海軍工廠。

「有馬中将、こちらです」

造船官の案内で勇が工廠の一角を訪れると、そこには二十四隻の小型艇が屋外に整然と並べられ、いつでも進水できる状態になっていた。とはいえ機銃や魚雷発射管等といった艤装品が搭載されていないため、彼女たちが軍用艦艇であることを示すものはその塗装ぐらいであり、形状は民間の船舶と酷似していた。

そしてまずは、スロープで海面へと降ろされた一番艇の「島千鳥」が進水。すると彼女の船首甲板が、常人には見えない閃光に包まれた。

（どうやら、ここにいる人間で艦魂が見えるのは自分だけのようだな）

進水した「島千鳥」に同乗していた造船官たちが、目前の閃光に対しても何の反応も見せないのを見て、勇は改めて艦魂が見える人間の少なさを実感する。そこに、横須賀で停泊中の戦艦「三笠」艦上から様子を見ていた三笠がやってきて、勇に耳打ちした。

（有馬中将、どうします？）

（右舷側にある居室のうち、一番船首寄りの部屋が予備士官室だから、そこに連れてきてもらえる？）
（了解です）

三笠が船首楼へと向かう様子を見届けると、勇は周囲で船体の状況を確認している技官に「艇内の様子を見てくる」と言い残して、予備士官室へと先回りをする。そして数分後、三笠が「失礼します」と告げた後に、「島千鳥」の艦魂を連れて部屋に入ってきた。

第一話　判で押した副産物（後書き）

作者「確かにあらすじどおり数奇な運命ではあるけれど、ただグダグダになっただけのような気がしないでもないと言ってみる」

富士「十話目まで書いておいてそう言うか。しかし、魚雷艇にまともな居住設備を設けられるのか？」

作者「基本的に、船体が漁船とほぼ同型ですからね。四〇ノットも速力が出せるのであれば、あとは居住性の改善や武装の強化を試みたほうが良いでしょう」

大隅「いっそ、航続距離や居住性を捨てて魚雷を四本搭載しては？　アメリカで建造された黎明期の魚雷艇を見るに、この排水量であれば不可能でもなさそうですが」

作者「そうなると、汎用性が薄れたり改設計の手間が増えたりする。ネタバレになるけれど、魚雷戦専門じゃあできることが限られて結果的に寿命を縮める羽目になりかねないから、純粋な魚雷艇としての能力には多少目を瞑ったよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回は艦魂の登場と雷撃訓練を描きます。次回『魚雷は貴重品』ご期待ください」

第二話　魚雷は貴重品

　三笠と共に予備士官室へ入ってきたのは、身長が三笠と同程度で顔立ちが幼いものの、凛々しい目と肩の辺りまで伸びた黒髪を持つ艦魂であった。
「有馬中将、お初にお目にかかります。自分が島千鳥型魚雷艇一番艇『島千鳥』です」
　低いがよく響く声で自己紹介を終えると、島千鳥は機敏な動作で立礼を行う。その様子は上総に匹敵するような実直さを感じさせたが、背が小さめなこととどこかあどけなさの残る顔によって、見る者に威圧感を与えるようなものではなかった。
「ところで、我が軍で初めての魚雷艇ということになりますが……彼女の階級は何ですか？」
「軍艦ではない艦艇で構成される隊のうち、一番艇ということはまず間違いなく最も小さな番号の隊を指揮するから……兵曹長、ということになるのかな」
「しゅ、就役直後からですか？」
　勇が提示した階級を聞いて、島千鳥は大きな声を上げる。彼女は自分の船体が小さいことから、自分は水兵扱いだと一人合点していたのだ。
「就役直後に連合艦隊旗艦を務める、つまり大将になることもあるから、特別なことではないよ」
「それに階級が上だからと言って、やるべきことが急激に増えるわけでもないですから」

「し、しかし……兎も角、最善は尽くします」

勇と三笠が安心させようとしても、島千鳥は目を逸らせて狼狽えるばかり。それでも根は生真面目であるので、彼女なりのせめてもの礼儀として「最善を尽くす」という言葉を使って口を濁した。それ以上の答えに窮した彼女は、どうにか話を変えようとする。

「ところで、私の姉妹艇は何処に？」

「明日から一日一隻ずつ船体を進水させて、それから順次艤装工事に移る。もう船体はほぼ完成しているから、全ての艇を一日で進水させることも不可能ではないけれど、それだとどちらが先に進水したかというので艦魂同士のいざこざの元になりかねないからね」

もしこの処置を行ったのが戦時であれば、一日でも、そして一隻でも船が欲しいであろう状況下では不合理な方策とも考えられる。しかし今は対米戦がいつ勃発してもおかしくないとはいえ飽くまで平時であり、また勇はこれまでの経験から艦魂の精神状態が船体に重大な影響を及ぼすことを承知していたので、敢えてこのようにしたのだった。

「そ、それは……確かに」

勇の考えを知った島千鳥は、彼が予想以上に艦魂のことを考えていたと知り、驚きを隠せない。

「もうこんな時間か。名残惜しいけれど、そろそろ戻らないと他の技師たちに怪しまれるな」

「そうですか……また来てくださいね」

「暫くは魚雷艇たちのを見届けるという理由があるから、ほぼ毎日来られるはずだよ」

「本当ですか？　有り難う御座います！」
「それやぁ、また明日」
「はい！」

喜色満面の三笠を見て自らも頬を緩めながら、勇は予備士官室を後にする。幸い他の部員に勇の不在を怪しむ者はおらず、勇はこの後もおよそ半月に亘って魚雷艇の進水に立ち会うとの名目で海軍工廠に通い詰め、三笠たちと話をすることができた。

進水した魚雷艇は一カ月程度で艤装を終え、相次いで就役。駆逐艦や潜水艦と同じく四隻で艇隊を、三個艇隊で魚雷艇隊を編成し、実用性を試験した後に四隻や十二隻を一単位としての戦闘訓練が行われることとされた。

一九四〇年四月十日、横須賀沖。

「据え物切りとはいえ、初の魚雷発射……気は抜けません」

海上に浮かぶ標的艦「浅間」に向け、「島千鳥」が四十ノット近い速力で突進する。そして彼我の距離が一海里程度にまで詰まったところで、「島千鳥」の左舷に設置された蝶番型の金具が外側へと倒され、訓練用の魚雷は無事「浅間」目掛けて放たれた。

この魚雷は目標に命中するか、あるいは一定距離を走った後に停止して、魚雷内部の気室によって浮上するようになっている。これにより標的が損壊する心配も無く、また空気を充填すれば何回でも訓練に使用できるようになっているのだ。

訓練用魚雷が再利用可能であることは、日本に限った話ではない。しかし当時の魚雷の価格は史実の現代における一億円に相当するた

め、モリブデンなどといった希少な金属を使用することもあって資源や予算余裕の無い日本には他国にもまして貴重品なのである。

「三……二……一……当たりました、よね？」

島千鳥が、懐中時計で自分が放った魚雷の命中予測時刻を確認して間もなく、「浅間」から手旗信号で船底への魚雷命中を確認したことが伝えられる。それを見届けた島千鳥は安堵の息を漏らすと、予備士官室へと戻っていった。

第二話　魚雷は貴重品（後書き）

作者「因みに、現代の一億円はハープーン一本分だそうです」

富士「時代の異なる貨幣の価値を換算すると、基準とするものによって相当な誤差が出るのは必定だが、同じく対艦攻撃を目的とする魚雷とハープーンが同一価格だというのは偶然にしては出来過ぎているような気もするな」

作者「なお魚雷一本は首相の年俸二年分、陸海軍大将の年俸三年分をそれぞれ若干上回るとのこと」

敷島「それを基準にしたら、現代の五千万円ぐらいになりそうだけどねえ……とはいえ海軍少尉の年俸だと二十人分を超えるから、そんなものなのかなあ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「対米開戦を迎えましたが、彼女たちの出番はなかなかやってきません。次回『特化ゆえの焦り』ご期待ください」

第三話　特化ゆえの焦り

その後の各種試験でもおおむね良好な成績を収めた「島千鳥」型魚雷艇は、対米戦時における島嶼の攻略及び防衛に備えて対米開戦までに四十八隻が就役。四個戦隊の陣容で、一九四一年十二月四日の対米開戦を迎えることになった。

一九四一年十二月八日、第二艦隊に随伴している輸送船団の旧捕鯨母船「扶桑丸」。彼女の甲板上には「島千鳥」型魚雷艇の第一陣である十二隻が並べられており、艦尾のスロープから海面へと降ろされ、フィリピン周辺の米海軍小型艦艇を掃討することになっていた。

即ち、捕鯨母船時代に鯨を甲板へと引き揚げていた動作の逆を行おうというのである。対米戦前の一時期において捕獲されていた鯨の一種である白長須鯨は長さが二十から三十メートル、体重が百五十トン程度あったため、巻き揚げ機等の設備を強化せずともそのまま魚雷艇を揚げ降ろしできるのだ。

後に、この際の経験を活かして同型の捕鯨母船「神州丸」は上陸用舟艇四十八隻を収容できる母艦に改装される。そして翌年十月のミッドウェー諸島の攻略時にその能力を遺憾なく発揮するのであるが、それはまた別の話である。

「姉さん、姉さん！　アメリカが本当に宣戦布告をしてきました！」
「やはり……とはいえ今更止めたと言われたら、一度抜いた刀を鞘に戻さなくてはいけないところだった」

母艦である「扶桑丸」の電信室で張り込みをしていた「菅根鳥」

の艦魂、菅根鳥が慌てた様子で「島千鳥」の予備士官室へと駆け込んでくる。彼女は姉妹の三女であったが、身長は島千鳥よりいくらか高く、見た目も姉が二、三年成長したような姿であった。なお、菅根鳥とは雉の別名である。

但し性格は真面目でこそあれ、姉のように落ち着いたものではなく、事あるごとに闘争本能をむき出しにする荒々しいものであった。そのため島千鳥としては妹の猪突猛進ぶりを危惧していたのだが、これまだは必要に迫られなかったためにあまり強く言うことも無かった。

「こうなったら、私たちでフィリピンにいるアメリカの船を一隻残らず沈めましょう！　十二隻で魚雷を立て続けに発射すれば、沈められない船などいやしません！」
「落ち着いて。まだ、フィリピンには戦闘機と爆撃機だけで二百機を超える航空機がいる。そんな状況でまともな対空兵装を持たない私たちが出れば、ただ素早いだけの的になるのは明らか」
「なら……なら、いつ出撃するんですか！」
「まず高雄からの航空攻撃と第二艦隊の艦砲射撃で、敵の航空基地を叩く。そうすればフィリピンにいる魚雷艇や砲艦を、私たちの手でより確実に仕留められるようになる」

出撃の時を今や遅しと待ち望む妹に圧されぬよう、島千鳥は説得を試みる。その後も史実で日本軍が行った水上機によるアメリカ軍魚雷艇の掃討や、反対に昭和二十年五月、日本軍第五特攻戦隊の魚雷艇十二隻が川棚から天草まで「震洋」二十六隻を護衛中、米戦闘機の攻撃を受けて壊滅的打撃を受け司令官も戦死してしまった事例を挙げ、航空機に攻撃された魚雷艇が如何に脆弱化ということを説いた。

「くっ……姉さんがそこまで言うなら」
「すまない。早く初陣を迎えたいのは、私も一緒だ」

冷静さを取り戻したものの悔しさや苛立ちを隠しきれない妹を見て、島千鳥も不満げな表情になる。二人とも魚雷艇として戦争を迎えたからには、一度でもいいから自分が放った魚雷で敵艦を沈めたいという信念を持っているため、ただ自分の船体が輸送船の甲板上に置かれているのを見るのは悔しかった。

また、日本にとってはこの戦争における相手国が事実上アメリカだけであるということも、二人の焦りを深刻なものにしていた。航続距離や凌波性で劣る魚雷艇にとって、アメリカとの主戦場となるであろう太平洋での活動には限界があり、精々占領した島の周辺を警備することしかできない。そうなれば当然、敵艦と遭遇する可能性は極めて低くなる。

そんな中、アメリカ側がある程度有力な艦船を配備しつつ、また魚雷艇も自由に航行できるほぼ唯一の海域がこのフィリピン近海だったのである。即ちフィリピンで敵艦に雷撃する機会が無ければ、彼女たちが実戦で魚雷を発射する機会はほぼ無くなってしまうのだ。

この日、第二艦隊はアメリカ海軍アジア艦隊との砲撃戦で、航空部隊はマニラへの航空攻撃で大戦果を挙げる。それを聞いた二人の焦りは、いよいよ限界に達しつつあった。

第三話　特化ゆえの焦り（後書き）

作者「この外伝も粗方書き終えましたが、次はどうするやら」

朝日「まだ、外伝の題材は残っているのでは？」

作者「一応、これ以外に四作品は書ける題材がある……艦魂の設定を思いつけば、だけど」

敷島「で、その四作品は？」

作者「兵装試験艦を兼ねたモニター、『海龍』のような有翼潜水艇、本編にも登場した黎明期の潜水艦、そして非現実的な感じが否めない潜水航空戦艦です」

大隅「せ、潜水航空戦艦とはこれ如何に？」

作者「作れるかどうかも分からない、国威発揚と戦後の経済効果を狙った艦だよ。一応、建て前では大型潜水艦の建造技術を獲得するために建造するということになっているけれど」

三笠「なら航空機、ましてや大型の艦砲を搭載する必要はないと思いますが……次回予告をお願いします」

作者「次回からは、ほぼ唯一と言ってもいい海戦の場面です。次回『明暗分かつ第一射』ご期待ください」

第四話　明暗分かつ第一射

開戦初日の攻撃で、アメリカ海軍アジア艦隊水上艦部隊と潜水艦にそれぞれ打撃を与えた第二艦隊と高雄航空隊は、翌日からフィリピンの砲台及び飛行場の攻撃に移行。開戦から三日間で主だった砲台や航空基地を破壊し、フィリピンの残存航空戦力は多くとも五十機未満と見積もられた。

一方の米軍は、アジア艦隊に主力水上艦艇や潜水艦を除き以下の艦艇を配備していた。そこで十二月十二日、第一魚雷艇隊に対し、主力を失ってコレヒドール周辺に遁走したこれらの艦艇を撃破せよとの命が下ったのである。

・エリー級砲艦（エリー、チャールストン）
全長一〇〇・一五メートル、排水量二〇〇〇トン、速力二〇ノット
四七口径六インチ単装砲四基（艦首と艦尾に背負い式）
二八ミリ四連装機銃二基（二番主砲艦尾側及び三番主砲艦首側、各主砲からさらに背負い式に配置）
三ポンド砲二基（艦橋上部両舷。二八ミリと合わせて四〇ミリ四連装機関砲に換装されていた説もある）
水上偵察機一機搭載（カタパルト無し）
・ＰＴ－３級魚雷艇（ＰＴ－３、ＰＴ－４）
全長一七・六七メートル、基準排水量二五トン、速力三二ノット
五三・三センチ魚雷発射管四基
・ＰＴ－５級魚雷艇（ＰＴ－５、ＰＴ－６）
全長二四・六八メートル、基準排水量三四トン、速力三一ノット（ＰＴ－６は三六ノット）
五三・三センチ魚雷発射管四基

十二月十二日午前九時、十二隻の魚雷艇はコレヒドール島西方五十海里の「扶桑丸」より出撃。四隻ごとに縦陣を組んで二十ノットの速力でコレヒドールへと向かっていたところ、およそ二時間後に前方から向かってくる二隻の砲艦を距離十三海里で捉えることができた。

「十二時の方向に縦陣を組む砲艦二、速力二十ノットでまっすぐこちらに向かってきます！」
「第一艇隊及び第二艇隊は一番艦、第三艇隊は二番艦を攻撃せよ！」
「面舵三十、前進全速！」

魚雷艇を発見した「エリー」級の二隻は艦首の六インチ砲で砲撃を加えるが、四十ノットの高速で航行する「島千鳥」型魚雷艇を捉えることは容易ではない。四七口径六インチ砲の初速は秒速七六二メートルであり、例え二海里しか離れていない目標に発射した場合でも、着弾までにおよそ五秒はかかるのだ。

そして四十ノットの最高速力を有する「島千鳥」型なら、その五秒間で百メートル程度移動することができる。この数字は同じく「エリー」級の持つ二八ミリ機銃でも一割弱しか違わず、ましてや一基で五トン近くもある鈍重な四連装機銃なのだから、どちらにせよ魚雷艇をまともに追尾するなど不可能であった。

とはいえ万が一にも六インチ砲弾が直撃すれば轟沈も有り得るため、各艇の乗員たちに緊張が走る。ところが幸い、魚雷発射前には一隻も直撃弾はおろか至近弾さえ受けずに懐へと飛び込むことができた。

「どうせなら、巡洋艦を仕留めたかったが……敵艦を討てるだけ、良しとしなくては」

未来位置を予測されて見越し射撃をされないよう小刻みに方向を変えながら、「島千鳥」たちは二隻の砲艦目掛けて肉薄する。その後目標との距離が一海里を切ったところで、各艇の艇長が一本目の魚雷を放つよう命じた。

「敵一番艦まで、距離一海里！」
「右舷魚雷投下！」

様々な方向から立て続けに魚雷を放たれ、「エリー」と「チャールストン」は右往左往するばかり。二隻は必死に回避運動を展開しようとするが、二十ノットの速力では移動距離にも舵の効きにも限界があり、彼女たちの状況は同じように攻撃を受けた輸送船と何ら変わらなかった。

一番槍として「島千鳥」の右舷魚雷が投下されてからおよそ一分半後、「エリー」の左舷艦首に水柱が立ち上る。同時に二千トンしかない彼女の船体は左右に大きく振動し、間もなくその船足も目に見えて鈍り始めた。

「よし、まずは一本！」

盛大な水柱を目の当たりにした島千鳥が、拳を握りしめながら吼える。しかしその表情に油断や満足感といったものは無く、彼女の関心事は早くも自分の左舷に搭載された二本目の魚雷を命中させることができるかどうかの一点に絞られていた。

第一射の命中を確認した「島千鳥」の艇長は、再度「エリー」の左舷から突入を図る。魚雷の命中による応急処置のためか迎撃のための砲火は鳴りを潜めており、これ以降魚雷を放つ艇は当の「島千

鳥」を含めてより容易に射点へとつくことができるようになった。
「姉さんはやっぱり当てたか……なら、私が外すわけにはいかない！」
菅根鳥が姉への対抗心を剥き出しにする中、「菅根鳥」の右舷から魚雷が投下される。彼女は自分の船体から放たれた魚雷の航跡をじっと見つめていたが、あろうことかその魚雷は目標である「エリー」の艦尾を掠るように通り過ぎてしまった。
「よし、このままなら……ってあーっ！　なんでそこで通り過ぎるんだよっ！」
悔しさと苛立ちから、菅根鳥は自分の髪を掻き毟る。そして一頻り掻き毟ると、「畜生、次は必ず当ててやるからな！」と吐き捨てた。
各艇が一本ずつ魚雷を発射し終えた段階で、「エリー」には左舷艦首に「島千鳥」の、右舷艦首に「黄昏鳥」の放った魚雷がそれぞれ命中。「チャールストン」も左舷中央部に「千歳鳥」の魚雷を受けており、二隻は早くも艦首が沈下し始めていた。
しかし、この時点で放たれていた魚雷は飽くまで各艇一本ずつ。そして五分と経たぬ間に、二隻の砲艦は再び魚雷の洗礼を受けることとなった。

第四話　明暗分かつ第一射（後書き）

富士「無粋だとは百も承知だが……普通、この二隻も航空攻撃で仕留めないか？」

作者「その方が安全かつ確実なのは、無論分かっていますが……空母が一隻しかいませんし、その艦載機も対地攻撃にかかりきりになっているのでしょうと言い訳を考えてみる次第です」

敷島「攻撃機の航続距離が長いんだから台湾、ブルネイと南洋諸島の三方向から攻撃隊を出せば、魚雷艇どころか母艦搭載機を使わなくても十分フィリピン全域の敵を叩けそうだけどねえ」

作者「とはいえ、この後彼女たちはどうしても冷や飯食いを強いられてしまうので、今のところはご勘弁を」

三笠「安全性よりネタを優先した弁解はさておき、次回予告をお願いします」

作者「第二射直前の『島千鳥』を、ある緊急事態が襲います。次回『自己操舵』ご期待ください」

第五話　自己操舵

再び、十二隻の魚雷艇が二隻の砲艦を襲う。だが目標の割り当てを変えなければ、「エリー」に攻撃が集中して「チャールストン」の損傷が軽微なまま逃走される恐れがあるため、第二射は第一射と逆の艦を狙うよう各艇に指示が飛んだ。

「この割り当てでは、攻撃が分散して最悪の場合二隻とも取り逃がす……なら、一本も無駄にはできない！」

一瞬にして最悪の事態を想定した島千鳥が、先程以上に緊張した面持ちで今度は「チャールストン」を見据える。「黄昏鳥」の魚雷によって彼女の速力は十五ノット程度まで落ちていたが、魚雷艇を近づけまいと健在な砲や機銃を乱射しており、「島千鳥」たちは激しい回避運動を余儀なくされた。

「このままでは、魚雷の発射時期を逸してしまう……っ！」

左右に揺さぶられる「島千鳥」の船首で、島千鳥は艇首の旗竿を右手で掴みながら歯噛みする。そんな「島千鳥」の様子を、後方から菅根鳥が恨めしそうに眺めていた。

「どうしたんですか、姉さん！　言っちゃあ悪いですけど、姉さんが前でうろうろしてたらこっちだって撃つに撃てないんです！」

姉と同じく一刻も早く魚雷を投下したい菅根鳥は、堪忍袋の緒が切れて絶叫する。喫水が浅い「島千鳥」型の船体に魚雷が直接命中する恐れは小さいものの、魚雷の信管が四十ノットの高速で航行することにより発生する海水の流れに反応し、魚雷が船体の至近距離

で爆発してしまう恐れがあるのだ。

「わかっている！　だが、私が私の船体を動かせるわけじゃない！」

その直後、「チャールストン」が遮二無二放っていた機銃の一斉射が「島千鳥」の艦橋を射抜く。同時に千鳥の頭からも一筋の血が流れ、痛みこそ大したことは無かったものの、彼女の脳裏を最悪の事態がよぎった。

「頭から少量の出血、ということは艦橋が機銃掃射を……まさか！」

島千鳥が艦橋に移動すると、そこでは艦橋にただ一人残って舵をとっていた艇長が頭に二八ミリ機銃の直撃を受け、見るも無残な姿で倒れていた。その光景に彼女は言葉を失ったが、すぐに事の重大さに気付くと、慌てて自分の舵輪に駆け寄る。

「くっ、私が人間なら他の乗員を呼べるというのに！」

乗員たちは機銃による「チャールストン」への牽制や魚雷の発射準備にかかりきりとなっており、誰一人として艇長が戦死したことに気付かない。このままでは「島千鳥」は操舵の自由を失った状態での航行を余儀なくされ、他船との衝突やさらなる被弾といった事態が考えられた。

そこで彼女は、自分の操舵を自分で行うことを決意。勇の後知恵や日本軍の諜報活動によってもたらされていた「エリー」級砲艦の武装配置から、二八ミリ機銃の配置場所が艦橋前と三番主砲手前（即ち何れも艦の首尾線上）であることを知っていたため、片方の機銃にしか狙われずに済む艦首からの接近を試みた。

また既に「チャールストン」は艦首に一本の魚雷を受けていたため、艦首に雷撃を集中することで船体の傾斜を悪化させることも島千鳥は狙っていた。無論、艦の真横から接近しないことによる雷撃命中率の低下は百も承知であったが、既に魚雷を「エリー」に当てているという事実からくる心の余裕が彼女にその代償を受け容れさせたのである。

「ええい、私の乗組員は何をしている！」

なかなか艦橋に来ない乗員への苛立ちを堪えつつ、島千鳥は左右に激しく舵を切る。だが運悪く、再び「チャールストン」の艦首機関砲によって一斉射が「島千鳥」の船首と艦橋を薙いだ。島千鳥は咄嗟にうずくまって機銃弾を避けると、やがて立ち上がり周囲を見渡す。

「くうっ！　……良かった、乗員は無事みたい」

この被弾で島千鳥自身の体には多数の小さな傷が生じたものの、彼女はそのことを全くと言っていいほど気にしなかった。自分の船体を自分で操縦していることへの興奮と緊張から、痛覚を含めた感覚が半ば麻痺していたのである。

同じ頃、「島千鳥」後部上甲板。

「なあ、いつになったら魚雷の発射指示が出るんだ？」
「分かりません……自分が、艇長にお尋ねしましょうか？」
「ああ、頼む。まさかとは思うが、さっきの機銃掃射で何かあったのかもしれないからな」

下士官の命を受けた水兵が、艦橋を訪れる。そして島千鳥と同じ

ように、無残な姿になった艇長を発見すると、すぐさま踵を返して下士官の元へと戻った。

「て、艇長は頭を撃たれて戦死！」

「何だと！　……仕方ねえ、俺が操舵を代わる！　魚雷の落射指示を出したら、お前が落とせ！」

「はい！」

　間もなく下士官は艦橋に入り、艇長を見ると忌々しげに舌打ちをする。そして舵を握ろうと舵輪に近づいてきたため、島千鳥は緊張が少しだけ解けてほっとした様子でその場を退いた。

「ふう。二人が入ってきたときに舵輪を回していたら、怪奇現象として扱われるところだった」

「へっ、これだけ近づいていれば……魚雷投下！」

　下士官の怒号とともに、島千鳥から二本目の魚雷が発射される。半海里程度の距離にまで接近して放たれた魚雷を避けるのは困難であり、程無くして「チャールストン」の艦首正面を深々と抉って見せた。

第五話　自己操舵（後書き）

朝日「生身の人間がこの口径の銃弾を浴びたら、どうなるのでありましょう？」

作者「自分のような奇特な人間は別として、正視に堪えない状態になるであろうことは想像がつくよ」

富士「そう言えば、何時ぞやは生身の兵士に四〇ミリ機関砲を使っていたな」

作者「まあ、少なくとも確実ではありますから」

三笠「ボフォース四〇ミリともなると、却って当てることが難しくなって確実性に欠ける気もしますが……次回予告をお願いします」

作者「一仕事終えた彼女たちの未来に、暗雲が立ち込めます。次回『理想と現実の乖離』ご期待ください」

第六話　理想と現実の乖離

「ざまぁ見ろ！　艇長の仇だ！」
「よし、後は離脱するだけだ」

魚雷を受けた「チャールストン」の艦首に立つ水柱を見て、島千鳥は満足気な笑みを浮かべる。そして艦首に二度も大穴を開けられた「チャールストン」へと、魚雷の投下を待ちかねた「菅根鳥」が間髪入れずに襲い掛かった。

「今度こそ当てなきゃ、姉さんに示しがつかないんでね！」
「魚雷投下！」

先程魚雷を外した「菅根鳥」から、二本目の魚雷が投下される。その魚雷は狙い過たず「チャールストン」の左舷艦橋直下へと吸い込まれていき、既に艦首が大きく沈み込んでいる彼女にとって、まさに止めとなり得る三本目の命中魚雷となった。

「よしっ！　やるべきことはやった、とっととずらかるよ！」
「取舵一杯、『島千鳥』に続いてこの海域を離脱する！」

だが、「エリー」と「チャールストン」の災厄はこれで終わったわけではない。その後「エリー」には「千鳥」、「チャールストン」には「巣立鳥」の魚雷が命中し、最終的な魚雷の命中数はそれぞれ「エリー」が三本、「チャールストン」が四本に上った。

そして二隻とも、魚雷命中から三十分乃至は一時間後に相次いで沈没。こうしてアメリカ海軍アジア艦隊に残された最後の大型艦である「エリー」級砲艦は二隻とも失われ、後には魚雷艇や雑役船と

いった小型舟艇だけが残された。

そして彼女たちも、第二艦隊の攻撃機や水上偵察による航空攻撃で全滅。フィリピンに配備されていたようなアメリカ軍における初期の魚雷艇は機銃を装備していないため、航空攻撃に対しては日本の「島千鳥」型にもまして無力であった。

アジア艦隊水上戦力の全滅が確認されたため、「扶桑丸」は十二隻の魚雷艇を回収すると一足先にフィリピン周辺海域を離脱。十二月二十八日にトラック諸島へ到着し、次期作戦に備えて修理と訓練を行うこととされた。

翌日、「扶桑丸」船上。

「あーあ、これで私たちも事実上お役御免なんでしょうか？　まさか、小島が多いからってアラスカのほうにまで行けとは言われないでしょうし」

「その公算が大きいな。まだ太平洋上にはサモア、ミッドウェー、パルミラと米軍の拠点が少なからずあるが、何れもウエークやグアムのように連合艦隊主力で叩くことになるだろうし、私たちをわざわざ連れて行く必要性が無い」

姉の言葉に、菅根鳥は寂しそうにため息をつく。自分の百倍近い排水量を有する艦二隻と戦闘し、姉妹と共同で両方の撃沈に成功したとはいえ、彼女の心中にある戦闘艦艇に宿った艦魂としての功名心や闘争心といったものを満たすには程遠かったのだ。

「史実みたいに、ニューギニアやソロモンで戦うことになればなあ。それこそ、魚雷艇や上陸用舟艇相手に数十隻同士での切った張ったができるのですが」

「だがそうなれば、我が国の被害も増大する。魚雷艇の艦魂としては望むところだが、日本海軍の艦魂としては同意しかねるな」
「それもそうですよねえ……うーん」

ところが日本軍によるフィリピンの占領後、アメリカ軍から物資や兵器を譲渡されていた民兵組織がフィリピンの各島で蜂起。これに対し日本軍は今村均陸軍中将に軍政の指揮を執らせ、日比協約の締結により一九四五年中の独立を保障するなど民心の掌握に努めたが、完全な鎮撫には至らなかった。

そこで民兵に対する武器の買い上げも行われたが、これに従わない例が続出。ここに至って、日本陸軍は比島上陸時に用いた上陸用舟艇を使い回して各島の巡回や武力制圧を行い、また日本海軍に対しても民兵の鎮圧に当たって協力を求めてきた。

これに対し、海軍はトラックにいた「扶桑丸」と十二隻の魚雷艇を派遣し、上陸用舟艇の護衛や対地支援に当てることを決定。大型艦艇との遭遇が想定されていない状況下での火力支援ということで魚雷落射機を外し、十六連装五インチ噴進弾発射機と陸軍用の迫撃砲を各一基搭載するという改装を受けたのだった。

第六話　理想と現実の乖離（後書き）

作者「我ながら、この船は使い物になるんだろうか？」

富士「米軍がベトナム戦で使った河川哨戒艇には、迫撃砲や擲弾銃が搭載された艇もいるらしい。少なくとも、まず使わないであろう魚雷を装備したままの状態で行くよりはましだろうな」

敷島「それに、米軍が使った揚陸艦艇の中にはロケット弾発射機を並べたのもいるしね。ただ、数の不足が気になるけど」

大隅「ところで、無粋なことをお尋ね致しますが……彼女たちは最早『魚雷艇』ではないのでは？」

作者「少なくとも建前では飽くまで仮の武装だから、艦種類別はそのまま。ただ、このあともっと変わった役目に回されることになるよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「果たして、変わり果てた自分たちの船体を見た彼女たちの反応は如何に？　次回『艦魂なりの自我』ご期待ください」

第七話　艦魂なりの自我

一九四二年四月五日、トラックにて出港準備中の「扶桑丸」船上。

「出番があるのは嬉しいけれど、何なんですかこの武装は」

「考えようによっては、体のいい実験台にされている気もするな」

魚雷艇を魚雷艇たらしめているはずの落射機が取り外され、跡に装備されたのは見慣れない箱型の物体と、陸軍で用いているものをほぼそのまま転用した迫撃砲。生まれてからの年月がさほど長くなく、陸軍の兵器を見た経験も少ない彼女たちにとって、自分たちの船体に搭載されたそれらの武装は非常に大きな違和感を抱かせるものだった。

「相手が賊風情とはいえ、こんなので叩けるんですかね？」

「それに賊と言っても、ただの賊じゃない。軍の装備を持った、厄介な連中だそうだ」

「ちえっ、だったらもっと上等な武器を寄越してくれればいいのに」

この武装は、史実のベトナム戦争においてアメリカ軍や南ベトナム軍が使用した河川哨戒艇（ＰＲＢ）に範をとったものであり、グレネードランチャーを噴進弾で代用したものである。なお火炎放射器の搭載も検討されたが、対米戦時の火炎放射器では五十メートル以上の射程を有することが難しいため、この時は歩兵や戦車への装備だけになっている。

翌日、「扶桑丸」はフィリピン近海に向け出港。十五日にマニラへ到着し、当面はここを拠点として活動することとされた。

四月十五日、マニラ港内。

「姉さん、あそこにいるのはどこの船ですか？　特設巡洋艦や特設駆潜艇の類なのでしょうが、あんな旗は見たことがありません」

菅根鳥が、船尾に見慣れぬ旗を掲げた武装商船のような船を見て訝しむ。彼女たちは日本から輸入した部品を使ってフィリピンで建造された巡視船艇の第一陣であり、日本の四個管区隊に相当する船艇が一九四五年までに建造される予定であった。

「資源と引き換えに、軍艦や巡視船の部品を輸出してフィリピンの船としてここで建造させているらしい。表向きの理由はフィリピンに造船技術を蓄えさせることだが、上総大将曰くフィリピンの防衛や治安維持はフィリピン生まれの艦船と艦魂にやらせたほうがいいというのが有馬大将の密かな目論見だそうだ」

「まあ……日本から嫁に出された艦魂よりは、その国に対する愛着も抱きやすいですからね。そうなれば艦魂の士気も上がって、戦隊にもいい影響があるという算段ですか」

姉の説明に納得した菅根鳥が、ふんふんと何度か頷いてみせる。ところがそんな妹に対し、島千鳥はひとつ咳ばらいをしたうえで、躊躇いがちに「ただ」と付け加えた。

「ただ？」

「その話を知った三笠元帥海軍大将が、有馬大将に『有馬さんは私たちのことが信用できないと言うんですか？』と拗ねた様子で詰問したせいで、有馬大将は困惑なさったようだ」

「あらら……まあ、そうなるでしょうね」

「ただ、三笠元帥海軍大将も本気で仰ったわけではなく、悪戯心からそのように仰ったらしい」

「それは……有馬大将にしてみれば洒落にならないような気が」

その時、船内放送で第一艇隊に到着早々の出撃命令が下される。これを聞いた菅根鳥は急いで自分の船体へと戻り、やがて四隻の魚雷艇は相次いで「扶桑丸」の甲板から、巻き揚げ機から伸びた綱を命綱にしつつ船尾の坂を滑り降りて海面に着水していった。

「我々はこれより、四日間の予定でシブヤン海周辺の哨戒と民兵組織に対する捜索及び攻撃を行う！　敵はアメリカ軍から火器や無線機を供与されており、武装は正規軍の歩兵部隊に匹敵する。気を抜くな！」

母船である「扶桑丸」の艦魂から作戦の内容を聞かされた島千鳥が、自艇の露天艦橋に立って作戦内容を伝達する。その後四隻は「島千鳥」を先頭とする一列縦隊を編成し、まずはルバング島やミンドロ島の西岸を迂回すべく舵を切った。

第七話　艦魂なりの自我（後書き）

富士「三笠……まあ、同じイギリス生まれの艦魂として気持ちは分からんでもないがな」

三笠「こ、ごめんなさい」

敷島「ところで、この民兵掃討作戦……ベトナム戦争の二の舞になりかねないと思うんだけど」

作者「こちらはベトナム戦争と違って、兵器や物資の追加供給がほとんどありません。ですから殺さずとも、弾薬切れや物資不足に追い込めればそれでいいのです」

朝日「フィリピンは、六カ国協約締結国の勢力圏に包囲されていますからな」

作者「グアムとウエークも落ちた以上、近い米軍の拠点はパルミラや米領サモアぐらいのもの。最早潜水艦による輸送でもない限り、アメリカが彼らに支援物資を送ることは不可能だよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「出撃した二隻は、思わぬ肩透かしを喰らうことになります。次回『虱潰し』ご期待ください」

第八話　虱潰し

史実においてフィリピンで日本に対する攻撃を行った組織としては、一九四二年二月六日にルソン島でルイス・タルクを指導者として結成された抗日人民軍（タガログ語でフクボン・バヤン・ラバン・サ・ハポン、略称フクバラハップ）が挙げられる。彼らはアメリカ軍のフィリピン上陸に際し対日協力を行ったが、その後は共産主義を掲げる勢力であることや、アメリカがフィリピン独立の功績を独占しようとしたことによって弾圧の対象になった。

しかしロシア革命に対して日本が干渉したため共産主義は史実ほど広まらず、共産主義勢力としてのフクバラハップは誕生しなかった。その代わりに暫定自治政府による軍の近代化の影響を受けて退役を余儀なくされた元軍人や、日本軍の捜索から逃れてきたアメリカ軍人によって、各島で小規模な組織が乱立する形になったのである。

こうした事態を受けて日本軍は、フィリピンに駐屯する部隊へ数百隻の上陸用舟艇や装載艇を配備して陸上部隊の移動手段とし、各島の組織を各個撃破することにした。ところが軍から流出した装備によって正規軍に準ずる装備を有する組織の前に、上陸作戦ということで一時的にせよ運用できる火器や車両が限定される日本軍は苦戦を余儀なくされた。

そこで今回、火力支援のために魚雷艇を火力支援艇に改装したうえでの派遣が為されたのである。

「しかし、これで食いついてくれますかね？」

民兵組織を誘い出すために高々と掲げられた軍艦旗を見て、菅根鳥が苦言を呈す。加えて武装は全て簡単に取り外せる覆いが被せられており、遠目には貨物を運ぶ小型船に見えるよう偽装されていた。

「仮装巡洋艦ならぬ、仮装哨戒艇といったところか」

「一応軍艦旗を掲げていますから、このまま戦闘に移っても国際法上問題は無いのでしょうが……何と最早」

その時、四隻の左舷側から発砲音が響き渡る。ほぼ同時に「島千鳥」前方の海面には何本もの小さな水柱が一直線に立ち上り、四隻に対して明らかに攻撃が行われたことを物語っていた。

「目標は左舷の発砲炎、撃ち方始め！」

森林の中で蠢いている人影目掛けて、機関砲や迫撃砲が矢継ぎ早に放たれる。なおこの時発砲されたのは、アメリカ軍が独立前のフィリピン軍に広く供与していたブローニングM１９１７重機関銃である。

「よくも、ようやくありつけた俺たちの仕事を奪ってくれたな！」

「アメリカについていりゃあ、あと五年も待たずに独立できたっていうのによ！」

日本軍の始動による陸軍近代化の影響は大きく、およそ十万名がいたフィリピン陸軍将兵は六万名に減少。一部は海軍や空軍、及び沿岸警備隊に配置転換されたが、これらの組織で生かせる技術や知識を持たない者は失職を余儀なくされた。そしてその腹いせに、軍の武器庫から兵器を奪って山中や森林地帯に立てこもったのである。

日本側の攻撃に対し、フィリピン軍は散開しながら重機関銃を乱

射。一個機関銃中隊が擁する八門の重機関銃による弾丸の雨霰は四隻の船体に多少の手傷を負わせていったが、船体の外板を貫通するまでには至らず、艦魂たちの傷も微々たるものであった。

「噴進弾撃ち方始め！」

鳴り止まぬ銃火に痺れを切らした「島千鳥」艇長の命令一下、まず四発の噴進弾が断続的に発射される。中に簡単な焼夷材を詰めた噴進弾は森林地帯に突入してから爆発すると、瞬く間に周辺の樹木を炎に包んでいった。

「う……うわあぁぁっ！」
「何だあれは！　とにかく逃げるぞ！」

民兵たちは慌てて離脱を試みるが、三脚を装備したブローニングM１９１７の重量は五十キログラム（銃本体のみで四七キログラム）を優に超える。そのため彼らは着のみ着のままで之逃亡を余儀なくされ、一個機関銃中隊分に相当する八挺の重機関銃は炎の中に消えた。

「敵は？」
「敵砲火、未だに沈黙しています」
「なら、我が隊もこの場を離脱し、予定どおりの針路を航行するぞ」
「両舷、前進原速」

未だに燃え続ける森林を尻目に、四隻は何事も無かったかのように哨戒を続行する。この作戦は一度につき数百名の死傷者を民兵側にもたらし、一年も経つ頃には物資不足によって投降する者や武装解除をして人知れず民間人に戻る者が続出し、民兵による武力攻撃は終息に向かって行った。

第九話　抗えぬ運命

一九四三年五月二十日、マニラ港内。既に十二隻の魚雷艇が民兵掃討作戦の火力支援についてから一年以上が経過していたが、未だにフィリピン近海を航行する日本海軍の艦艇や日本船籍の商船に対する砲撃や銃撃が無くなったわけではなく、彼女たちは未だにフィリピンでの哨戒を指示されていた。

同日、マニラに停泊している「島千鳥」露天艦橋。

「それにしても、埒が明かないですよ。いつになったらあいつらはいなくなるんですか？」

「だが、日本の艦船に対する襲撃は確実に減ってきている。現に前回の哨戒だって一回も敵と遭遇しなかった」

「そもそも、なんで陸軍将兵を四万近くも退役させたんですか。フィリピンの人口が千六百万を降らないって言うなら、十万の陸軍も十分維持できるでしょうに」

菅根鳥の指摘は尤もなことであった。当時は大半の国が徴兵制度を施行していることもあって兵員の人件費が安価であり、平時であろうと人口の一パーセントを超える人数の常備軍を持つ国も少なくなかった。その事実を勘案すれば、海空軍や沿岸警備隊に割く人員を計算に入れても、十万名の陸軍は十分許容範囲であると言えるのだ。

「確かに。とはいえ、今フィリピンの防衛は半ば我が国が受け持っている状態。おまけにフィリピンは独立に備えてあと数年で公共設備や生活基盤も整えなくてはならないから、フィリピン自体が軍にかける費用は少ないに越したことはないというのが正直なところの

はず」
「けっ、しけてやんの……まあ、御役御免になるよりはましですけど」
菅根鳥が何気なく口にした、「御役御免」という言葉。それに気づいた二人は対米戦後の自分たちの処遇について考えを巡らせてみたものの、喜ばしいものは到底想像できなかった。
「姉さん、確か有馬大将がいた歴史のアメリカ魚雷艇って戦後には……？」
「大半が処分若しくは売却。一部の艇は焼却処分されたとも聞いているが、私たちは木造艇ではないからその心配はないだろうな」
「なら一安心……じゃあないですよ！　ってことは、私たちは生まれて十年足らずでお陀仏ってことですか！」
姉の言葉を理解した菅根鳥は顔面蒼白になったかと思うと、次の瞬間には顔を真っ赤にして怒鳴る。その変わり様に島千鳥は暫し呆然としていたが、やがて冷静さを取り戻すと慌てて妹をなだめにかかった。
「いや、私たちは沿岸警備隊の巡視艇や指定船とほぼ同型の船体を採用している。だから海軍を追い出されたところで、簡単な改装さえ受ければ、働き口はいくらでもあるはず」
そこまで言ったところで、「島千鳥」の露天艦橋に別の艦魂が姿を現す。特設艦船ということで本来着ないはずの軍服に身を包んだ長髪長身の彼女こそ、対米戦の開戦以来「島千鳥」以下十二隻の母船を務めてきた「扶桑丸」の艦魂であった。
「扶桑丸さん、何かありましたか？」

「お二人を含めた十二隻と私に、新しい命令が来ています」

島千鳥と扶桑丸は、互いに敬語で話す。特設艦船とはいえ一万トンを上回る特務艦の扶桑丸は便宜上少佐（島千鳥は兵曹長、菅根鳥は三等水兵）の階級を与えられているため、島千鳥は最初から敬語を使っていたが、扶桑丸も島千鳥だけに敬語を使わせるのは失礼だと考えた結果、今では双方がこのような口調で話していた。

「それでは、私はこれで」

島千鳥が命令書の入った封筒を受け取ると、扶桑丸は急ぐようにしてその場を後にする。これは「扶桑丸」の船橋から二人が話し込んでいる様子を見かけた扶桑丸が、姉妹の会話を必要以上に中断させないためと考えての気遣いであった。

「で、新しい命令は何です？」

扶桑丸が去るのを見届けた菅根鳥が、期待しながら姉の持つ封筒を見つめる。それに急かされるようにして島千鳥が封筒の中から書類を取り出すと、そこには意外な文面が記されていた。

第十話　屈辱の転属

「内地に戻り……新型巡視船艇の試験艇として改装？」

　島千鳥は驚きのあまり、声が裏返りそうになる。菅根鳥も驚いたが、自分たちが海軍を離れなければならないということに対する憤りがすぐさま込み上げて、たまらず「どういうことですか！」と叫ぶや否や姉の手から命令書をひったくるように奪い取った。

「内地に戻り、外国船舶による密漁取り締まり及び外国艦船による我が国の領域侵犯に対応した新型巡視船艇の試験艇に改装……なんですかこれは！　私たちは、もう海軍からはお払い箱ということですか！」

　これまでの退屈な任務で溜まっていた鬱憤が爆発したのか、菅根鳥は顔を真っ赤にして怒り狂う。また怒りのみならず、彼女の中には籍が海軍のままとはいえ戦力外通告にも似た命令を受けたことへの悔しさと、もうひとつの理由が余計に彼女の神経を逆撫でしていた。

「なんで私たちが、あんな商船に豆鉄砲をくっつけたような連中のための実験台にならなきゃいけないんです！　こんなことになるぐらいなら、いっそ……！」

「静かに！　近くにはその商船や沿岸警備隊の船艇がいるんだから、聞かれたらどうなるか」

　冷静さを失って沿岸警備隊を侮辱し始めた菅根鳥を、島千鳥が慌てて静止する。菅根鳥に限らず、未だに海軍軍人や艦魂の中には沿岸警備隊を蔑視するものが少なからずおり、それに反発した沿岸警

備隊の隊員や艦魂との間で実力行使を伴った喧嘩さえ発生していた。

「幸い、この文書を読む限りでは海軍籍はそのままだ。そんなに気落ちすることも無い」

「とはいえ、ねえ……試験がしたいなら、あいつらが自前で試験艇を建造すればいいでしょうに」

当時はまだ高速の船舶による密輸及び密漁や艦艇による哨戒侵犯が発生しておらず、最高速力が二〇ノット程度である在来型の巡視船艇でも対応には困らなかった。しかし史実の現代における日本海や東シナ海の状況を考えれば、工作船や軍艦による領海侵犯の恐れが史実より低下したとはいえ、数十年以内に四〇ノット程度の速力をを発揮できる巡視船艇の建造は必須と言えた。

ところが、当然日本にそのような高速の準軍事用船舶を運用した経験は無く、それらを用いた船舶の臨検や拿捕に関する経験も同様であった。そこで一先ず、フィリピンの民兵組織をほぼ掃討し終えた「島千鳥」以下十二隻の魚雷艇を改装して、海軍籍のまま訓練や運用経験の蓄積を行わせようとしたのである。

「今、内地の造船所はどこも軍艦や戦没した商船の代船を建造するのに手一杯だ。私たちと同じような大きさの漁船とて、場合によっては特設監視艇などになって喪われていると聞くからな。巡視船艇も、修理や代船の建造で限界だろう」

なおこの対米戦で失われた沿岸警備隊の船艇は最終的に五十隻以上に上ったが、この数字は平時において毎年老朽化のために除籍される船艇の数と大した開きは無く、それによって代船の建造も平時に毛の生えた程度の早さで進んでいるだけであった。

島千鳥が事実を誤認した理由は、フィリピンには沿岸警備隊や海軍の艦艇があまり来ないために他の艦魂との交流も少なく、情報が入ってこなかったということが大きい。加えて一九四二年中にはしばしばフィリピン方面への護衛に訪れていた海上護衛総隊の艦艇も、戦局の変化に伴い中部太平洋やアラスカ方面へと優先的に回され、フィリピン近海での船団護衛は専ら沿岸警備隊と接点の無い特設艦船によって行われていた。

そして沿岸警備隊そのものは、開戦以来内地や委任統治領の警備に集中しており、精々南洋諸島ぐらいにしか現れなかったのである。だが何よりの理由は、海軍と沿岸警備隊の間における交流は艦魂たちもあまり望んでおらず、彼女自身たちから情報を得る機会が無かったためであった。

「ちえっ……まあ、それが私たちの任務だっていうんならやりますけれど」

心底不服そうな表情でぼやく妹を、島千鳥は責める気になれなかった。それは命令書を読んだ時点で菅根鳥の反発や愚痴に予測がついていたというのもあるが、何より彼女自身、最前線に身を投じない沿岸警備隊への侮蔑の念を抱いていないわけではなかったからである。

第十話　屈辱の転属（後書き）

作者「私の操作ミスにより、本作第八話以降の本文を投稿する順番が前後していたため、今朝修正致しました。読者の方々に多大なご迷惑をおかけすることになり、申し訳御座いません。なお次回は、修正前の第九話で投稿を予告していた『前線ぼけ』となります」

第十一話　前線ぼけ

一九四三年五月三十日、十二隻の魚雷艇（武装は対民兵用のまま）を載せた「扶桑丸」が横須賀港に到着。この頃連合艦隊は既にハワイ諸島近海へ向かっており、またミッドウェー以西の太平洋における制海権と制空権はほぼ日本の手中にあったため、横須賀港は戦時とは思えないほど静かであった。

「いくら、本土空襲の危険が皆無に近いとはいえ……こんなに落ち着いていていいんですか？」

母船である「扶桑丸」の甲板に載せられた「島千鳥」の船首楼から、戦時中とあって多数の艦艇を建造している海軍工廠以外の閑散とした様子を見て、菅根鳥は驚きを隠せない。無論万が一に備えて高射砲や戦闘機部隊、加えて偵察機等も配備されていたが、出撃するのは前者が週一回程度の戦闘訓練、後者は定時の哨戒ぐらいのものである。

だがこれには、戦時ということで本来横須賀に停泊しているはずの艦がほぼ全てで払っているということも考慮しなければならない。そのため艦船の整備に従事する部署や港内の雑役船はむしろ平時より動きが少なく、それと引き換えにメジュロの雑役船や港務部は、直前の二十七日までハワイ攻略作戦に向かう連合艦隊を送り出すべく忙殺されていたのである。

「それこそ、南洋諸島や内地にまで敵艦隊が来るようなら、沿岸警備隊の出番になる。もし沿岸警備隊が敵を見つけ損ねたら、あとは陸上の電探にでも頼るしかない」

「あんな鈍足な連中に、アメさんの機動部隊が捕捉できるんですか

ねえ……アメさんがその気になれば、今からだって有馬大将がいらっしゃった歴史で言うところの東京初空襲のような真似が可能でしょうに」

原因こそ違えど、菅根鳥の指摘は的を射たものである。沿岸警備隊の船艇は航続距離の都合もあって精々沿岸から二百海里程度までの哨戒しか想定しておらず、米艦載機の航続距離から米機動部隊が攻撃隊を送り出せる範囲を考えれば、沿岸警備隊の捕捉前に攻撃隊を出撃させられてしまうことは確実であると言えるからだ。

陸上の電探も、例え標高五百メートルの地点に配置していたところで、電探の能力に関わらず海面上の敵艦を捕捉できる距離は五十海里程度。高度一千メートルを飛行する航空部隊であれば百海里以上の距離で捕捉できるが、どちらにせよ攻撃隊出撃前の捕捉は困難なのであった。

「どんなに船艇を増やしたところで限界はあるし、それに数千隻の巡視船艇を揃えられるような余裕は我が国にはない。だから、沿岸警備隊だけの責任ではない」

個人的な感情を抑えて冷静でいられる分、島千鳥は沿岸警備隊の限界を全て沿岸警備隊の責に帰すつもりではなかった。だが菅根鳥は飽くまで敵機動部隊の攻撃隊を放つ前に発見すべきだと考えていたため、姉の弁護も受け容れようとはしなかった。

「万が一帝都が爆撃されて壊滅でもしたら、誰が責任をとるんです！」

「敵を陸上の電探で捉えることができれば、敵編隊が我が国の上空に到達する前に数十機の戦闘機を迎撃に向かわせられる。後は、彼らを信じるしかない」

「それで、迎撃できればいいですけどね」

菅根鳥は飽くまで攻撃隊出撃後の迎撃に否定的であり先手必勝に拘ったが、これ以上姉と論争を繰り広げたところで埒が明かないと考え、それ以上は何も言わなかった。そのため島千鳥としてもかける言葉が見つからず、二人はそれっきり押し黙ってしまった。

やがて、菅根鳥は気まずさの余り黙って「島千鳥」を後にする。島千鳥は妹の無礼にも思える程の素っ気なさに気分を害したが、自分のはっきりとした物言いにもその一因があることは認めざるを得ず、後を追って詰問するということはしなかった。

翌日、「扶桑丸」より横須賀海軍工廠へと降ろされた十二隻はそのまま入渠。対地攻撃用の噴進弾発射機や迫撃砲を撤去し、この後は将来建造される巡視船艇のあり方を模索するための試験艇として、装載艇や起重機、放水銃等といった多種多様な物件を搭載しては試験に当たる日々を過ごすこととなる。

第十一話　前線ぼけ（後書き）

作者「執筆中作品には投稿順に通し番号を振ってあったのに、どうしてこうなった……鬱だ」

富士「まあ、せめて早期に発見できただけましかもしれんがな」

作者「早期とはいえ、修復は一週間近くたってからです。しかし、本当にどこをどう間違えたのやら」

三笠「後悔の念は理解できますが、次回予告をお願いします」

作者「内地に戻った『島千鳥』が行うことになった、危険な実験とは？　次回『親亀子亀』ご期待ください」

第十二話　親亀子亀

一九四三年七月一日、相模湾を航行する魚雷艇「島千鳥」露天艦橋。

「これは……親亀も子亀も諸共にこけるのがオチでは？」

普段は冷静な島千鳥が、顔を青くしながら引き攣った笑いを浮かべる。彼女の視線の先では、「島千鳥」の船体の船橋後部に起重機と丁型巡視艇の同型艇（試験用に新造した艇。書類上は海軍所属の雑役船）を搭載されており、その姿は見るからに安定性を欠いたものであった。

「何ですかこれは。海軍は……いや沿岸警備隊は、自分たちの実験のために姉さんに死ねと仰るのですか？」

あまりにも危険なその外観に、菅根鳥は憤りを隠せない。加えて試験の内容は「搭載舟艇の海上における発進と収容」であり、起重機で雑役船を舷側に向けて吊り下げれば、最悪の場合母艇そのものの横転も有り得ないとは言えないようなものであった。

「第一、何でこんなことを海軍の私たちがしなければならないのです。船体は殆ど同型なのですから、沿岸警備隊の巡視艇にやらせれば良いでしょうに！」

「落ち着いて。将来建造される丙型巡視艇は、私たちのような出力強化型。なら在来の巡視艇を使うより、私たちを使い回したほうがより実践に即した試験結果を集められるというのは事実」

姉の言葉に、菅根鳥は反論のしようが無い。またたとえこの任務

を解かれたところで、他に魚雷艇である自分たちができるような任務も見当たらず、菅根鳥は不貞腐れながらも渋々事態を受け容れるしかなかった。

なお対米開戦以来他の「島千鳥」型はウエークやグアムといった占領地域の島嶼防衛に使用されていたが、これらの島嶼に魚雷艇で攻撃しなければならないような大型艦で編成された敵艦隊が現れる可能性は極めて低く、現れたとしても航空部隊や潜水艦で対応したほうが安全かつ確実であるということで戦力としての価値は期待されていなかった。

アメリカ軍主力艦艇との交戦を想定したうえで魚雷艇と航空機を比較した場合、こちらに差し向けられる火器はどちらにせよ二〇ミリ機銃や四〇ミリ機関砲であり、それらによる被弾は程度の差こそあれ致命傷になり得る。そして被弾確率は低速且つ大型な魚雷艇のほうが当然高く、危険性もそれだけ大きいことにある。

そして魚雷の命中率や、同じ範囲を哨戒するための数を運用に要する人手では特筆すべき差が無く、速度では航空機の方がはるかに勝っている。これらのことを考慮すれば、各基地の周辺を警備するための主力は魚雷艇ではなく航空機にした方が良いのは明らかであり、入り組んだ島嶼という活躍の場を失った魚雷艇たちは勇の危惧どおり冷や飯食いを余儀なくされることになったのだ。

「こんな冷や飯食いを続けさせられるぐらいなら……いっそ建造されない方がましでしたよ！」

悔しさに耐えかねた菅根鳥はそう絶叫すると、「島千鳥」を後にする。島千鳥は「菅根鳥」に移動して妹の暴言を窘めようかとも考えたが、彼女自身としても同意する余地があったため、暫し悩んだ

末その場に留まった。

やがて魚雷艇たちはそれぞれの海域に到着し、各種装備の試験に従事。「島千鳥」では起重機が慎重に動き始め、甲板上の雑役船を海上に降ろそうとしていた。

雑役船を吊るした起重機が舷側を向き始めると、それにつられて「島千鳥」の船体も傾斜する。だが幸いなことに傾斜は予測より緩く、そのまま雑役船を海面に降ろすまで、「島千鳥」の船体に異常は発生しなかった。

「一体、いつまでこのようなことをしていればいいのやら。私たちは……魚雷艇として、小なりとはいえ戦闘艦艇として建造されたはずなのに」

舟艇の発進試験を終え、「島千鳥」の起重機は立て続けに収容試験へと移る。試験結果の収集や記録のために技術者たちが慌ただしく自分の甲板上を駆け回っている様子を見ながら、島千鳥は寂しげに愚痴を呟くばかりであった。

この時行われた発進試験及び収容試験の結果、二五トン級指定船に起重機を搭載した場合、丁型巡視艇程度の船舶であれば揚げ降ろしが可能であることが判明。一九五〇年以降に建造された丙型巡視艇にも同等の艤装が施されたが、重心が上昇して復元性が低下するため、荒天時には舟艇の搭載を行わないこととされた。

第十二話　親亀子亀（後書き）

富士「待て、これは横転しかねんぞ？」

作者「海上保安庁の灯台見回り船には、『島千鳥』型より小型でも舟艇を搭載していた例があったはずです。無論荒天時の揚収作業は危険ですが、不可能ではありません」

敷島「でも船舶の臨検や追撃なら『島千鳥』型でも十分にできるし、丁型巡視艇を運ぶならもっと大型の船に任せた方がいいと思うんだけど……まさか、趣味？」

作者「否定はしません（キリッ」

三笠「天長節だというのに、一体何を言っているのでしょうか……頭が痛くなってきますが、次回予告をお願いします」

作者「対米終戦の報を聞いた二人は、最早これまでと死を覚悟します。次回『早すぎる引き際』ご期待ください」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0318z/

艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝　魚雷艇「島千鳥」型

2011年12月23日05時55分発行